

韓國日本語學會 第47回 國際學術大會

< 主 題 >

言語コミュニケーションの日韓対照研究

< 招請講演 >

言語コミュニケーションの韓日対照研究

沖裕子 (信州大)

- ・日時：2023年 3月 25日(土)
- ・場所：徳成女子大學校 人文社会館 101号
(ZOOMを利用したハイブリッド型学術大会)
- ・主催：韓國日本語學會, 日韓コミュニケーション研究会
- ・主管：韓國日本語學會
- ・後援：JAPAN FOUNDATION SEOUL , (株)時事Books



韓國日本語學會
The Japanese Language Association of Korea

韓國日本語學會

第47回 國際學術大會

- 日時：2023年 3月 25日(土)
- 場所：徳成女子大學校 人文社会館 101号
(ZOOMを利用したハイブリッド型学術大会)

<Program>

13:00-13:20	<ul style="list-style-type: none">・開會式・總會 <司會:辛銀眞(仁川大)> 開會辭:盧姪鉉(徳成女子大 / 韓國日本語學會 會長) 祝 辭:加藤剛(日本國際交流基金Seoul文化Center 所長) 金志宣(梨花女子大 / 韓國日語教育學會 會長) 功勞杯授与
13:20-14:30	<ul style="list-style-type: none">・招請講演 <司會:郭銀心(中央大)> 言語コミュニケーションの韓日対照研究 沖裕子(信州大) 討論1:黃永熙(漢陽Cyber大) 討論2:李恩美(明知大)
14:30-14:40	<ul style="list-style-type: none">・研究倫理講演 <司會:辛銀眞(仁川大)> 蔡盛植(高麗大)
14:40-15:00	休息
15:00-15:40	<ul style="list-style-type: none">・企劃發表1 <司會:梁乃允(中央大)> 日本語の「察し」に対して韓国人日本語学習者が抱く印象 -勧誘に対する断り場面から- 松樹亮子(慶南大) / 渋谷雅円(立命館アジア太平洋大) 討論1:小松奈々(高麗大) 討論2:早矢仕智子(宮城学院女子大)
15:40-16:20	<ul style="list-style-type: none">・企劃發表2 <司會:李粹暲(嘉泉大)> 「ねざらい」行動の日韓比較 持田祐美子(Lapu-Lapu Cebu International College) 討論1:沼田浩通(南ソウル大) 討論2:長島倫子(建國大)
16:20-17:00	<ul style="list-style-type: none">・企劃發表3 <司會:鄭賢兒(西京大)> 初対面自由会話における話題展開分析 -在日コリアンの資料を中心に- 張良光(Catholic大) 討論1:張允娥(釜慶大) 討論2:大黒恵美(國際交流基金バンク日本文化センター)
17:00-17:10	<ul style="list-style-type: none">・閉會式 <司會:國生和美(東國大)> 閉會辭:盧姪鉉(徳成女子大 / 韓國日本語學會 會長)

學術發表會

[招請講演]

- 言語コミュニケーションの韓日対照研究 3
沖 裕子(信州大学 名誉教授)

[企画発表1]

- 日本語の「察し」に対して韓国人日本語学習者が抱く印象
－勧誘に対する断り場面から－ 3
松樹 亮子(慶南大学)・渋谷 雅円(立命館アジア太平洋大学)

[企画発表2]

- 「ねぎらい」行動の日韓比較 23
持田祐美子(ラブラブセブ国際大学)

[企画発表3]

- 初対面自由会話における話題展開分析
－在日コリアンの資料を中心に－ 3
張良光(カトリック大学)

韓國日本語學會
第47回 國際學術發表大會

學術シンポジウム
(學術심포지엄)

招請講演

言語コミュニケーションの韓日対照研究

沖 裕子(信州大学 名誉教授)

1. 『日韓中対照 依頼談話の発想と表現』について

刊行された『日韓中対照 依頼談話の発想と表現』（沖裕子・姜錫祐・趙華敏著、2022年、和泉書院）の内容に触れながら、言語コミュニケーションの韓日対照研究について展望する。

同掲書は、日本語接触問題の解決をめざす国際共著として、また、対照談話論の基礎的研究として、日本語、韓国語、中国語を母語とする共著者3名の内省をもとに分析を行い、約1200名の大学生を対象とした国際調査によって結果の一部を検証した。

分析は、談話の同時結節モデル（図1）に立って行っている。

依頼を談話レベルにおける一つのジャンルとしてとらえ、その上で、日本語、韓国語、中国語では依頼ジャンルの特徴が異なっていることを実証したものである（表1）。

アンケート調査が明らかにした中から、日韓における親しい友人との交流態度の差異を挙げる（図2）。こうした社会文化の異なりが、依頼ジャンルの性格の違いにつながっていると分析した。有効回答数は、信州大学の学生358人、韓国カトリック大学の学生377人である。

また、意識態度の異なりとして丁寧さに対する感覚の違いを挙げる（図3）。何を丁寧と感じるか、表現意識にも顕著な差が認められた。

依頼というジャンルの異なりを支えるものの一つとして談話構築態度があると分析した。日本語の談話構築態度は三項関係であり（図4）、韓国語の談話構築態度は二項関係である（図5）ことを述べた。

時間的展開 ⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒

A	社会文化	
B	意識態度	
C	談話構造	
D	談話表現	

図1 談話の同時結節モデル（部分）

表1 日韓中対照からみた依頼談話の特徴

	中国語	韓国語	日本語
重要な依頼を行える相手	関係（グワンシー）	ウリ	ウチ
互恵関係（個人対個人）	有り	有り	無し
互恵関係の機能または様態	実利応酬関係の強化と情 的交流の醸成	ウリ間の親密で隙 間のない感情の醸 成。軽微なものは 様式化	－
「場面意識」	無し	無し	有り
「場面意識」の機能または様態	－	－	両者が場をとともにみ ることで、状況と心 情を共有
依頼意識	関係の仲ではないか（相 手と自分は同じ感覚）	友達だからこそ迷 惑をかけあえる	友達だからこそ迷惑 はかけられない
依頼態度	相手が実現しやすいよう にはっきりと述べる	率直に、包みかく さず、はっきりと 述べる	迷惑をかけて申し訳 ないという気持ち で、状況をやんわり 述べる
依頼内容	理由、希望、条件を言葉 で明確に伝える	自己の実情を率直 に言葉にする	場の共有を前提とし て、状況と心情を言 葉にする
配慮の示し方	選択の余地を与える表現 と、相手の面子を立てる 表現を添える	相手の実情を知っ て理解しているこ との表現を添える	迷惑をかけることへ の恐縮と挨拶を添え る

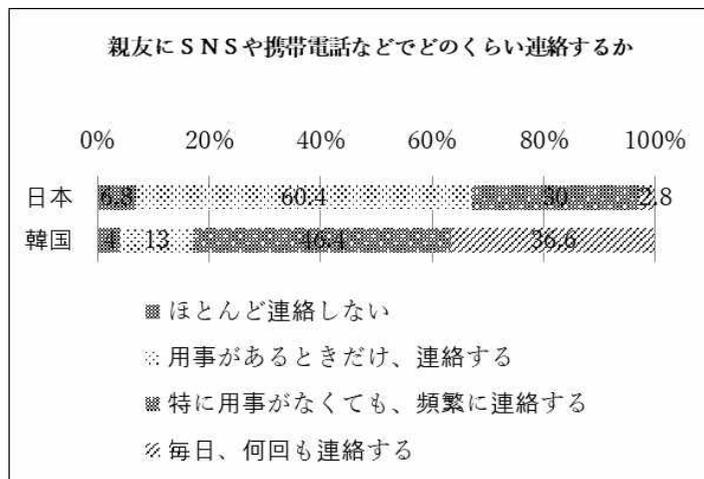


図2 親しい友人との交流実態〈日韓〉

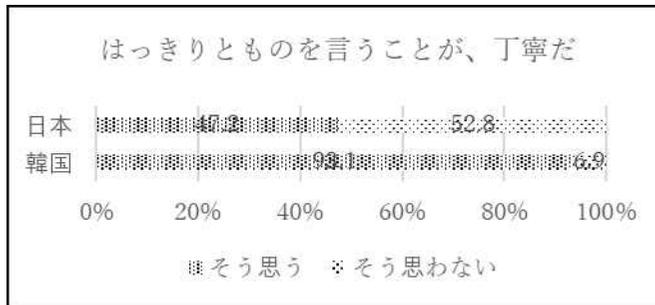


図3 ていねいさの意識〈日韓〉

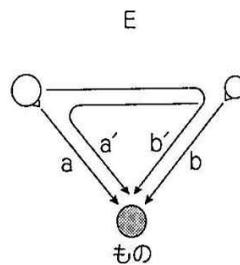


図4 三項関係（日本語の談話構築態度）

図4は浜田寿美男（1995）『意味から言葉へ—物語の生まれるまえに』ミネルヴァ書房より引用

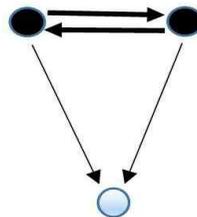


図5 二項関係（韓国語の談話構築態度）

2. 研究史をふりかえる：対照研究と接触研究

言語コミュニケーションの研究史を展望する際に、対照研究と接触研究は重要な鍵を握っている。特に言語接触研究は、言語コミュニケーションの研究に大きな寄与をすることを述べたい。

対照研究と言語接触研究は関係が深いが、それぞれ以下のような異なりもある。対照研究が言語Aと言語Bの異なりに関心を持つのに対して、言語接触研究は、異なる母語や母方言をもつ話し手Aと話し手Bの言語使用に焦点をあてていく。ごく大雑把に言ってしまうと、対照研究は言語の

研究が主となるが、言語接触研究は言語使用の研究が主となる。

日本語を媒介語とする場合、日本語母語話者Aの使用する日本語（AC言語）と、韓国語母語話者Bの使用する日本語（BC言語）に言語接触問題が生じることは、とりもなおさずAC言語とBC言語に違いがあるからにはかならない。すなわち、言語接触研究においては、話者Aの使用する言語と、話者Bの使用する言語は、異なっていることが前提となっている。

これを敷衍すると、母語を同じくする場合の言語使用においても、話し手Aの言語と話し手Bの言語は異なっている前提に立つことにつながる。実際、同一の言語共同体内での言語にも種々の変異があることは社会言語学の研究史が物語っているところである。

理想的な一人の話者を立てて解明ができるのは言語体系を対象とする場合であって、言語コミュニケーションにおいては、たとえ同一の言語共同体内であっても異質な他者との会話を対象とせざるをえない。

言語体系の研究と異なり、言語使用の研究には、表現（言語産出）とともに、理解（言語受容）の研究が必須である。表現と理解は、逆回しの関係ではとらえられない。もし話し手Aの表現が、誤りなく話し手Bに理解されるのだとすれば、言語接触問題は起きないことになる。言語接触問題が起きるということは、話し手Aの表現と話し手Bの理解が別の過程を持っていることの証左である。

言語接触研究は、このようなことから、言語コミュニケーション研究の本質的モデルとなっており、今後の研究に大きく寄与する重要な鍵を握っていることを認識したい。

3. 研究史をふりかえる：意味ある細部の発見の蓄積

言語コミュニケーションの韓日対照研究のこれまでをふりかえって概括すると、意味ある細部の発見が認められる。膨大な研究的蓄積の中から、韓日国際共同研究の成果を含め、日本語で記された若干の研究を挙げる。

任榮哲・井出里咲子（2004）『箸とチョッカラックーことばと文化の韓日比較』大修館書店

生越直樹（2012）「「配慮」の示し方—日本と韓国の言語行動の比較から—」三宅和子・野田尚史・生越直樹『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房

尾崎喜光編（2008）『対人行動の韓日対照研究—言語行動の基底にあるもの』ひつじ書房

姜錫祐（2007）「韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究」『日本語学研究』19 韓国日本語学会

洪珉杓（2007）『日韓の言語文化の理解』風間書房

渡辺吉銘・鈴木孝夫（1981）『朝鮮語のすすめ—日本語からの視点』講談社

ここでは、「意味ある細部」を効果的に言及した研究から2例をとりあげ紹介したい。

(1) 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する研究』ひつじ書房より
前日買ったスカートを着いて学校に行った。

「おはよう。」

「あ、おはよう。」

友人は私の新調したスカートに気付いていないのか、何も言ってくれない。

「あの、これ昨日買ったけど、どう？」

「わあ～かわいい、とてもかわいいと思った。」

やはり、気付いていたんだ……、うれしいなあ。

「そうでしょ！私、何でも似合うから。ははは。」

「はあ？」

私、何かまずいこと言ったっけ。呆れた顔されたけど……。 (1頁より)

(2) 三宅和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房より
ロサンゼルスで、車を橋げたにぶつけてしまった。

誰かが、救急車を呼んだ。

救急隊員がドアをあけ、心配そうに「大丈夫ですか」と聞いてきた。

とっさに震える声で「大丈夫です」と答えた。

すると私の期待とは裏腹に、隊員は「了解」と手短かにいうと、その場から立ち去ってしまったのだ。

(a) アメリカでは救急車は有料である。自力で病院に行こうとする人が一定割合いる。だから、「大丈夫」という言葉を聞いて、救急車はそのまま帰ってしまった。[社会のしくみの違い]

(b) 日本語の「大丈夫です」は、相手に心配をかけない意図で使用。

米語の“I'm all right”は、相手の助けは必要ないという意図で使用。

[表現的意味の違い]

(以上、同書 iii ~ iv 頁を整理)

研究史全体をふりかえると、「意味ある細部」の発見が「全体」とどう結びついているかの解明は十分ではないように感じられる。これには、「全体」そのものに関する研究が未だ手薄であることが要因の一つとなっているかと思う。

言語コミュニケーションは言語のどのレベル(単位)の問題かということが十分に共有されていないように考える。言語コミュニケーションは、談話のレベルで起こり記述される問題だと考える。談話単位の研究は、過去に敬語や言語行動の研究に付随して考察が試みられてきているが、議論の蓄積は必ずしも十分でない。談話は閉じた単位ではなく、開いた単位であることについて知識の共有が必要だと思われる。

4. 研究を進めるために：言語のレベルと単位

言語コミュニケーションを言語学的に研究するとはどういうことだろうか。そのために、言語学における単位を問い直してみたい。

従来の言語学では、分節的単位の研究が中心であったが、談話は超分節的単位である（沖裕子（2006）『日本語談話論』和泉書院）。アクセントやイントネーションなど音レベルの超分節的単位の研究は一定の研究的蓄積があるが、談話の超分節性については、ほとんど研究的整備がなされていない。

談話が超分節的単位であるとは、次のようなことから知られる。

- 1) 線条性を超えて、意味のまとまりをやりとりする
- 2) 意味内容は、言語記号を超えて表現・理解される。

話されたり書かれたりした記号そのものの意味を一次的意味内容、記号の意味を超えて伝達される意味を二次の意味内容と呼ぶと、二次の意味内容は分節されていない。すなわち、分節性をもつ言語記号で、非分節の意味内容を伝え合っているのが談話単位である。これによって言語コミュニケーションが行われていると考えられる。

超分節的単位は、部分が全体の一部となるような階層性を成さない。部分が全体と同時に結節している。また、形を持たず、型で記述される単位である。

5. 研究を進めるために：ジャンルの発見

これまで、話し手の属性や、場のわきまえ、相手との関係等で使用できるスタイルが異なっていることはよく知られており、類型的スタイルの研究は厚い研究的蓄積がみられる。

それに対して、ジャンルは会話の言語計画においてなくてはならない概念であるにも拘らず、研究はきわめて手薄である。手足のように使いこなしていながら、話者はそれを説明できないことが多いのは文法と同様である。

ジャンルの研究がなぜ必要かといえば、それを身に着けることなしには言語コミュニケーションができないからである。「読む」ことにおいては、「小説」と「ノンフィクション（事実をもとにした小説）」、あるいは「ルポルタージュ（現地取材した報告記事）」を分別せずに読み始める人はいない。これは、「話す」ことにおいても同様である。

どのジャンルの会話なのかが分からない進行は、人を不安にさせる。会話においては、話し手と聞き手でジャンルの理解がなされてから進行することがあるとともに、話し手と聞き手で使用ジャンルの想定が異なった状態から会話が始まることもある。ジャンルの理解をすり合わせながら会話が進行することは例外とはいえない。会話では、ジャンルが複雑に使用される。ジャンルの研究は、決してたやすいものではないが、言語コミュニケーションの研究において必須である。

6. 研究を進めるために：談話構築態度

ジャンルの研究と並行して進める必要があるのは、談話構築態度の研究である。

たとえば、渡辺・鈴木（1981）によると、次のようなことが指摘されている。日本語では、梅の木を話題とした雑談のジャンルが成立するのに対して、韓国語では違和感があるとされる。これは、なぜなのであろうか。ジャンルの成立を支える談話構築態度の違いによるという考え方が一つの解釈である。

梅の木を話題にした日本語の雑談は次のように紹介される。

（3）甲「もう梅の花が咲いていますね」

乙「ええ、紅梅です。おとし近所の方からいただきましたね……」

甲「色がとてもきれいですね」

乙「もう一本裏にもありますがね」（171頁を引用整理）

日本語談話では、自然を題材としながら長々と会話を続け、ほとんどそのまま切り上げることもできる。

これに対して、韓国語では、梅の木は糸口であり、本題へと相手を引き込む展開にしなければ座りが悪いとされている。韓国語の自然な談話展開は次のように説明されている。

（4）まず梅の花の話題はあくまで話の糸口にし、この梅の花を介して相手をひき込む方

向に話を持っていくべきと考える。

甲「もう梅の花が咲いていますね」

乙「ええ、今年は早いようですね」とまずあいづちを打っておき、次には、

乙「お宅にも確か梅の木がありましたね。もう咲いたんでしょう。ずいぶんと立派な木でしたね」と話題を広げながら、自分と相手の距離を縮める方向に話をすすめる。

甲「色がとてもきれいですね」という相手の賞賛に対しては、これをきちんとうけて、

乙「そうですか。お目の高いあなた様からおほめをいただきました」とかいいながら、話を本題に移すために、梅の話のうち切る準備に入るであろう。

（174-175頁から引用整理）

渡辺・鈴木（1981）によれば、韓国語の談話展開は、「相手への反応をはっきり示すと同時に、質問、冗談、ユーモアでもって、相手への働きかけを積極的に行う」と説明される。

ジャンルは、会話の目的と作法を蓄える言語的型である。そして、ジャンルの成立を支える構えがある。談話構築態度とは、母語話者が無意識のうちに共有している、当該言語産出時の構えを指している。英語におけるポライトネスも、談話構築態度の一つであると考えられる。談話構築態度は言語ごとに固有のしぐみを有しているからこそ、異言語接触での言語コミュニケーション問題につながるといえよう。談話構築態度は、それだけで言語コミュニケーションのしぐみの

解明につながるのではなく、ジャンルの解明と合わせて説明される必要があると思われる。すなわち、部分と全体を統合した記述が望まれる。

7. おわりに

ここでは、次のようなことを述べた。

- 1) 言語コミュニケーション研究にとっては、話し手と聞き手の言語が異なっていることを前提に進める必要がある。
- 2) 対照研究に含まれる言語接触研究はその要件を具えており、言語コミュニケーション研究に貢献する可能性が高い。
- 3) 談話は、超分節的単位である。
- 4) 超分節的単位は、形ではなく型で記述される。
- 5) 超分節的単位は、部分と全体が階層的に組み上げられているわけではなく、部分と全体が同時に結節している。
- 6) ジャンルは、談話単位のひとつである。
- 7) 談話構築態度とジャンルは密接に関係している。
- 8) ジャンルや、談話構築態度は、言語ごとに異なった特徴を示す

人間の言語を研究するとき、普遍性を追求する立場と個別性に重点を置く立場がある。両者は最終的にはつながっていくが、言語接触の研究はまず後者の立場に立つといえよう。

言語は人と人を結ぶ大切な絆となるが、同時に、「私」の個人的体験や思考を表現するための網目としては粗いものであり、使い方に習熟する必要がある。この粗い網目の性質と使い方をよりよく知ることは、人間同士の理解を深めるうえで重要である。この点で、言語コミュニケーションの研究を大切にしたいと願う。

初学者は「意味ある細部」の発見から入り、その後は「全体」を視野に納めながら細部を位置付けることで研究が進んでいくことを期待したい。当然のことながら、講演者自身もその一人としてさらに歩を進めたいと念じている。

(2023年3月25日 於韓国日本語學會 招請講演)

韓國日本語學會
第47回 國際學術發表大會

學術シンポジウム
(學術심포지엄)

企劃發表1

日本語の「察し」に対して韓国人日本語学習者が抱く印象

－勧誘に対する断り場面から－

松樹 亮子(慶南大学)・渋谷 雅円(立命館アジア太平洋大学)

1. はじめに

本研究は、2022年度に行った日本語の授業で“日本語の察し”をテーマに作文課題を実施した際、「察し」に対して否定的な意見を述べる韓国人日本語学習者が多く、これに疑問を抱いたことに端を発する。筆者は、韓国人が日ごろ相手に察してもらうことを意図したような言動をすることを経験的に感じており、また韓国にも相手の気持ちを察するような言動が見られることは先行研究にも指摘がある。では、なぜ学習者は日本語の「察し」を否定的に捉えたのだろうか。学習者が作文課題をするにあたって紹介した日本語の「察し」は、男性が女性を食事に誘い、女性が「あのう ちょっと……。」と断る場面で、誘った男性が相手の事情を察して「じゃ、また今度」と言ったという内容であった。この日本語の「察し」のどこに引っかかりを感じ否定的に捉えたのかを、学習者が書いた作文をもとに分析したい。

2. 先行研究

「察し」は、その語用論的機能から「言いさし」「断り」「副詞(ちょっと)」「語末表現」「配慮」等とともに研究が行われてきた。本発表では、勧誘と断りに係わる「察し」を扱うことから、ここでは「依頼・勧誘－断り」の観点から日韓の言語行動を比較した研究を主に概観する。まず、金(2011)は日本語母語話者と韓国語母語話者を対象に、相手の発話が「断り」だと判断するタイミングの違いについて調査を行った。その結果、判断する箇所に日韓でほとんど差は見られなかったが、大半の日本語母語話者が断りだと察する「間接度の低い断り」の場合、韓国語母語話者にはそう捉えられていないことがわかった。また、日韓の遠慮・察しコミュニケーションの違いについて分析した小山他3名(2013)は、予測される摩擦を回避するためにメッセージを自己抑制する行為が、日本人にとっては他者への配慮につながると認識されるのに対し、韓国人にとっては他者への配慮に関わる概念とは認識されないと考察している。ここから、断りだと察する表現や配慮をどのような行動により表出するかは日韓で異なると考えられる。

次に、日韓の断り表現の違いを直接的断り、間接的断り、付属表現、緩和表現の意味公式によって分析した櫻井恵子 他1名(2007)は、日本人と韓国人は疎の上下関係において誘いを断る場合には、双方とも間接的断りの意味公式を使用する点で共通しているが、韓国人は「理由」の使用回数が圧倒的に多かったと述べている。このような日韓の言語行動の差異の理由として、吉田(2014)、曹(2022)は母語や母文化の影響を挙げている。吉田(2014)は、韓国日本語学習者に日本語の断りの場面にふさわしい表現をメールサンプル10編の中から順に並べさせ、評価の基となった規範と、それによる調整行動について調査を行った。その結果、母語の規範が評価に影響していることが明らかになっている。曹(2022)は、日本語母語話者へ宛てた断りのメールの中で、韓国人日本語学習者が使用したストラテジーを学習レベル別に調査した。その中で、中級学習者は「謝罪」「提案」等のストラテジーを、そして初級学習者は「断りの理由」を日本語母語話者よりも多用する傾向にあったことから、母文化の影響を指摘している。

以上から、断りだと察する表現や配慮を表出する行動、断りの際の「理由」の有無、その分量においても日韓で差異があると推測できる。しかし、以上の研究は主に断り行動における日韓の差異について述べたもので、日本語の「察し」に対する印象を調査したものではない。そこで、本発表では日本語の「察し」に対する韓国人日本語学習者（以下、学習者）が抱く印象について調査し、その印象を抱いた理由を明らかにしていきたい。

3. 研究方法

3.1 対象者

対象となるのは、2022年度1学期にK大学において日本語教育を専攻する学科において行われた「日本語教科論理及び論述」の授業を受講した大学生20名である。この科目は、日本語教師を目指す学習者を対象に、読み書きの能力向上を目指す科目であり、課題文の読解、要約、自身の考え等の作文を授業内の主な活動としている。

<表1 対象者と授業実施時期・授業の流れ>

対象者	「日本語教科論理及び論述」受講生 20名(男 13名、女 7名)
実施時期	2022年 1学期 全15週(週2時間)授業のうちの4週目(2時間)の授業
授業の流れ	<p>テーマ「日本語はあいまい？」</p> <p>1) 導入 - クラスで話し合い 約5分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本語はあいまいな言語なのか。」 ・「“察する”という日本語を知っているか。どういう意味か。」 <p>2) 課題文 読解&クイズ(簡単な内容確認)</p> <p>使用教材：「日本語はあいまい？」 (일본어뱅크 독해1(동양북스)¹⁾ Part16 p.127-134)</p>

	<p>3) 小グループで考察および話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日韓での断り方に違いがあるのかについての考察 ・自身が断るときはどう言うか。 ・誘って断られたときに相手に理由を尋ねるか。 ・日本人の話し方が分かりにくいと思ったことがあるか。 ・察しの文化をどう思うか。 <p>4) 作文 話し合った内容をもとに自分の考えを作文としてアウトプットする。自身がそのように考える理由を必ず記載するよう条件を提示し、200～400字程度で簡単にまとめるように指示。</p> <p>5) 提出とFB 作文は、校内ポータルサイトにファイルをアップロードし提出とした。また、授業時間内に作文が書き終わった場合はその場で教師によるフィードバックを行い、時間内に書き終わらなかった場合は宿題として提出させたものを教師が確認しフィードバックを行った。</p>
--	--

3.2 調査方法

まず、当該授業の中で学習者が課題文を読み「日本語の察しについての自身の考え」を作文した内容を分析した。この作文分析では、「日本語の察し」に対し、A.肯定的か否定的か、B.肯定・否定の印象を持った理由、C.話し手と聞き手の関係性と自身の立場、D.日韓を比較するような内容の有無、という4つの観点から内容を確認した。

4. 分析

前述の4つの観点に沿って作文を分析した内容を以下で提示したい。

A. 肯定的か否定的か

「察し」に対して、「いいと思う」等の肯定的な意見を述べた学習者は20名中4名、また、「分かりにくい」「まどろっこしい」「息苦しそう」等の否定的な意見を述べた学習者は11名だった。また、中立的な意見を表したのは3名で、うち1名は“必要な文化ではあるが自分は言葉を確実に使用してコミュニケーションを成立させたい”というどちらかという否定に近い意見であった。また、おそらく否定的な立場を表明したと思われるが、内容の読み取りが困難な学習者が2名おり、今回の分析調査には含めないこととした。

1) 当テキストには、日本語を4～5か月学習した初級から中級のはじめのレベルに該当する読解文を掲載したとの提示がある。

<表2 「察し」に対する評価>

人数計(名)	内訳(名)			
	肯定	否定	中立	立場が不明のため除外
20	4	11	3	2

(1) 肯定的な意見の例²⁾

・日本人の友達が「今、電話できる？」と聞いたとき、「今はちょっと…」と言ったらすぐ「そっか！じゃ…また今度！」で話が終わるが、韓国人の友達の場合「なぜ?!今、暇だね?!」などで今、なぜ電話ができないのかについての理由を聞きたがります。私は、その言い訳をするのが苦手だから「察し文化」はいいと思います。(KF2)

・少し曖昧な反応を出し、相手から察してもらえる事はとてもありがたい話です。逆に、しつこく理由を聞いてくる人には、(何で僕の気持ちを察してくれないのだろうか)と、イラッときます。(KM2)

(2) 否定的な意見の例

・私は日本人の「察しの文化」について否定的に考えます。相手の気持を考えることは嬉しいけど、私は韓国の文化に慣れてるから、「察しの文化」に慣れてなくてもややもやした気分になるかもしれません。(KF3)

・個人的に、「察しの文化」はまどろっこしいと思います。もちろん、初めての人や目上の人などには相手の気を察して嫌がる言葉を避けたり個人の事情に深く踏み入れないことは必要でそれが美德だと思います。でもそれが友達や親しい人にも適用されると理由を問わないから相手に興味がなく見えたりはっきり話してくれないから一緒にいるのが負担なのかなと思われと思います。(KM1)

B. 肯定・否定の印象を持った理由

学習者の作文の内容から、否定的な印象を持った11名全員が“理由を言って欲しい”、“はっきり言って欲しい”と述べており、理由を言わない、あるいははっきりした返答がないと感じたことが否定的な意見を持った要因だと考えられる。また、否定的な意見を述べた学生だけでなく中立の立場である1名も「韓国人同士であれば、はっきり言う必要がある場合もある」という否定的な意見を持った学習者と同様の感想を述べている(表3)。“理由を言って欲しい”、“はっきり言って欲しい”と述べた学習者の作文からは、以下のような意見が見られた。

2) 作文から引用した例の中に意味理解に支障が出る誤りがある場合は筆者が修正。

<表3 「察し」に対する学習者の意見>

	人数計(名)	内訳(名)		
		肯定	否定	中立
理由を言って欲しい	8	0	7	1
はっきり言って欲しい	6	0	4	2
理由に関する言及なし	4	4	0	0

(3) “理由を言って欲しい”、“はっきり言って欲しい”と述べた理由

- ・友だちが断った理由を言ってくれないと心配
- ・理由を問わないと相手に興味がないように見えたり、一緒にいると負担に感じるのかと思う
- ・自分の気持ちを隠してばかりいては人間関係が弱まっていく
- ・はっきり言えば生まれなかったはずの誤解が生まれる

C. 話し手と聞き手の関係性と自身の立場

読解教材には話し手と聞き手の関係性についての記述がなく、また作文を作成するにあたりその関係性に関する指示もしなかったため、学習者は自由に関係性を設定し、各々の考えを書いたようである。今回は否定的な意見を持った学習者がなぜその印象を抱くに至ったかを明らかにすることが目的であるため、ここでは否定的な意見を述べた11名について、想定した場面と立場を確認する。

<表4 学習者が想定した場面と立場>

	人数計(名)	内訳(名)						
		断り場面			場面記述なし			
		聞き手	話し手	両方	聞き手	話し手	両方	不明
理由を言って欲しい	7	3	0	2	2	0	0	0
はっきり言って欲しい	4	0	0	0	1	1	1	1

想定した立場を確認すると、聞き手6名、話し手1名、両方3名、不明1名であった。ここから、聞き手の立場から意見を述べた学習者が多いことがわかる。両方と述べた学習者の意見にも聞き手の立場からの記述があるため、11名中9名が聞き手の立場を想定したことになる。また、両方と回答した学習者3名のうち2名は「理由も言わずに断られたら嫌だから、自分も理由を知らせることが正しい」「人の気持ちを察することが下手なので、各自自分の気持ちをはっきり言った方がいい」という聞き手の立場から考え、その後話し手の立場において自身が取る行動について述べている。以上から、学習者は「あのう ちょっと…」のみの返答の場合“理由を言って欲しい”、“はっきり言って欲しい”という否定的な意見を持つ可能性が高い。しかし、場面に関して記述がなかった学習者が6名おり、断りの場面を想定してそう述べたかは今回の作文では読み取れなかったため、今後インタビューを行い詳細を確認する必要がある。

読解教材で扱われた「察し」は、相手を傷つけないように話し手(誘われて断る側)が直接的な表現を避けて断る聞き手への配慮が見られる「察し」であり、話し手が断る理由を語らずとも聞き

手(誘う側)が“断られた”と察する状況である。教材には「日本人は相手が言いたくないことを聞くのは失礼だと考える」「相手の気持ちを否定する言い方を避ける傾向がある」(예자료, 2012)との記述があり、それが聞き手に対する配慮だということを学習者は教材を通して知識を得ているはずである。また、授業時の小グループでの話し合いの前に、勧誘を断る場合に韓国語ではどのように表現するのか学習者に考えさせ、直接的な断り表現を避ける傾向が韓国にもあるという気づきを促す活動も行っている。しかし、それにもかかわらず、聞き手の立場から否定的な意見を述べる学習者が多数いたことから、聞き手を配慮した「あのう ちょっと…」という表現を、韓国人日本語学習者は配慮と捉えない可能性が高いということが分かった。

D. 日韓を比較するような内容の有無

学習者の作文からは、「韓国人である私は」のように自身の背景にある韓国文化に言及し、それを基準にした書き方をする内容が多数見られた。今回は読解教材を使用し日本語の「察し」とはどのようなものかを考えさせたが、教材自体に日韓を比較した内容がなかったこともあり、結果的に学習者は自身の文化に置き換えて考え、韓国文化と異なることから否定的な印象を持った学習者がいたようである。しかし、当該授業が日本語教師を目指す学生が対象である以上、日本語の「察し」に対して個人的に否定的な見解を持っていたとしても、日韓の言語行動の差異や文化背景をひとつの事実として中立的に考えられるよう、読解教材の選定だけでなく授業での教師のアプローチにも改善が必要なことが浮き彫りとなった。

5. まとめと今後の課題

今回の作文分析では、“日本語の察し”に対して「はっきり言って欲しい」「イエスかノーかわかりにくい」などの回答が多数見られ、「察し」を否定的に捉える学習者が多かった。韓国人は断る理由を多用する(曹英南, 2022)、韓国人は「理由」の使用回数が圧倒的に多い(櫻井恵子 他1名, 2007)と先行研究にあることから、学習者がこの「察し」を母語や母文化を基準に評価したのであれば、理由のない日本語の「あのう ちょっと…」という表現に不足を感じた可能性は大にある。また、聞き手を配慮するためのこの表現を、学習者は配慮と捉えない可能性が高いという結果となったが、これは小山他(2013)の内容と合致する。裏を返せば、日本人が「あのう ちょっと…」に理由を追加して返答した場合、学習者の抱く印象は変化する可能性があると言うことである。ただ、今回の調査で見られた「はっきり言って欲しい」という意見は「理由まではっきり言ってほしいのか」あるいは「イエス・ノーをはっきり言って欲しいのか」を判断することはできなかった。そして、学習者が想定した場面を読み取ることができない作文もあったため、今後はフォローアップインタビューを行い、追加の情報を集める必要がある。加えて、学習者が日本語の「察し」について学び、日本の言語行動の文化背景を中立的に捉えられるよう、読解教材の選定や授業の進め方についても検討が必要である。

< 参考文献 >

- 金楨憲(2011) 「「断り表現」における「察し」－韓国語母語話者を中心に－『일본근대학연구』 32, pp.7-28
- 小山慎治 他3名(2013) 「「遠慮・察しコミュニケーション」から見る日韓の違い－対人関係に関する意識調査－」『韓国日本語学会第27回国際学術発表会論文集』, pp53-57
- 櫻井恵子, 斎藤麻子(2007) 「OPIのロールプレイに見る韓人日本語習者の断り方」『일본학보』 72, pp.71-84
- 曹英南(2022) 「習得レベル別に見る韓国人日本語学習者のEメールにおける断りのストラテジー－日本語母語話者との比較を通して－」『일본어교육』 102, pp33-46.
- 吉田さち(2014) 「断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか－言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて－」『跡見学園女子大学コミュニケーション文化』 8, p.44-55

< 韓国語書籍 >

- 메구로 마코토(2012) 『일본어뱅크 독해1』 동양북스

韓國日本語學會
第47回 國際學術發表大會

學術シンポジウム
(學術심포지엄)

企劃發表2

「ねぎらい」行動の日韓比較

持田祐美子(ラプラプセブ国際大学)

1. はじめに

我々は日常の様々なシーンやタイミングで相手に「ねぎらい」を示す。「ねぎらい」については、塩田(2012)が「配慮表現」の調査報告において、「お疲れさま」という「ねぎらい」の定形表現(倉持2011, 宅間1999)を扱っていることから、「配慮行動」の一つであることは明らかであり、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つこと」を目的として示されるものである(山岡2010)。

「ほめ」や「謝罪」、「申し出」、「断り」等、配慮行動の日韓比較については任・井手(2004)など多くの研究者らによって社会言語学的なアプローチでの研究が行われてきた。しかし、「ねぎらい」についてはどうだろうか。本発表者の管見の限りにおいて、日韓比較のみならず「ねぎらい」という言語行動自体に関する研究が活発に行われているとは言い難い(後述)。

本発表は、我々がどのように相手の労苦を汲み取り、どんなときに「ねぎらい」を示しているのかについて検討するべく行われた予備調査の結果を報告し、今後の課題を提示するものである。

2. 先行研究

本章においては、「ねぎらい」の日韓比較研究について先行研究を概観し、さらに当該研究の嚆矢となる日本語文化における「ねぎらい」研究を紹介する。

まず、守屋(2002)においては、38場面の「ご苦労様でした」と「수고하셨습니다(헷다)」の自然さ・不自然さについて日韓両ネイティブを対象にアンケート調査を実施した。その結果、韓国語の「ねぎらい」について、有益状況は必ずしも条件にならないことや、親しい関係同士の場合には日本語に比べて「ねぎらい」や感謝の表現が使用されにくいことなどを述べた。さらに、後続研究である守屋(2005)においては、感謝と「ねぎらい」との関係や、話し手と聞き手との受益関係に注目して日韓比較を行っている。

한미경(2011)では、映像媒体での談話に見られる配慮行動について広く調査しており、その中で日韓の「ねぎらい」表現についても言及している。ただし、この調査においては韓国語が9件(수고하셨습니다/수고했다=5/1件、수고하세요=3件)、日本語が8件(お疲れ様/お疲れ様でした=4/2

件、お疲れ/お疲れでした=1件)という少数の表現しか抽出されていないため、主張内容が汎用的であるとは言い難い。

金(2022)は、平成27年に日本の文化庁により行われた大規模な「国語に関する世論調査」をもとに、韓国語の言語行動との比較を考察している。「韓国人の場合、「自分のために仕事をしてくれた」人や、「宅配の人」が相手の場合、「ねぎらい」の表現形式を全く選ばずに感謝の表現を選択することなど、示唆的な主張をしているが、平成27年の調査の項目について韓国語に直訳しただけのものを提示しているため、特に韓国語文化における「ねぎらい」について考える際には、この結果について慎重な見方が必要となろう。

持田(2023)によると、2023年1月に「CiNii(<https://cir.nii.ac.jp/>)」で「ねぎらう」「労う」「ねぎらい」「労い」という4つの単語で検索すると、83件がヒットしたが、心理学や看護学、または幼児・初等教育の分野でその効果について述べるものが圧倒的多数であり、言語や文化に関連すると見なせるものは4件であったという。それを鑑みると、「ねぎらい」の日韓比較研究は比較的、なされていると言っても良いだろう(それでもその他の配慮言語行動に比べると少ないことも事実である)。

釜田(2018)は本稿の嚆矢となる社会言語学的アプローチによる研究である。日本語母語話者の初対面での自然会話に見られた「ねぎらい発話」を考察しているが、1. 属性に対する質問→応答→属性から労力を推測した「ねぎらい」、というパターンが存在すること、2. 「ねぎらい」と「愚痴」に関連性があること、3. ねぎらわれた相手が相手を羨むような振る舞いをする、こと、という3点が目立って明らかになった点である。また、この論文においては「相手の苦労を汲み取りながら、相手に寄り添おうとしている」ことを「ねぎらい」と定義した。また、この定義に合致する場合でも、感情の表出が明確である場合は「共感」であり、不明確である場合に「ねぎらい」としてしている。

最後に、前述においても挙げた本発表者の直近の発表である持田(2023)を挙げる。これにおいては、「ねぎらい」行動の定義の再考と「ねぎらい」の定型表現に関する予備調査が行われている。これにより日本語文化における「ねぎらい」は、韓国語文化と比較したときに、他の配慮言語行動と同様に定型的な表現が使われやすいことや、「ねぎらい」とは、何らかの労苦が明確に存在することを認め、それを労苦した(している、する)本人に対して明確な感情を伴うことなく表現することで相手の気分を高めようとするものであることが定義として提示された。さらに、その労苦に関してはその労苦の存在自体を明確に認めるのであれば具体性は問われないことや、労苦した側の労苦がもう一方への恩恵に関与しないときに表わされることが明らかになった。

ただし、この“恩恵の移動”に関しては、蒲谷他(1998)の主張と相反する。すなわち、「お疲れ様」系表現と、「ご苦労様」系表現はともに「ねぎらい」の表現であるが、「ご苦労様」系は自分(話者)の利益になることをしてもらったことに対する「ねぎらい」であり、「お疲れ様」系表現はそうではない、という主張である。さらに、この蒲谷他(1998)においては、「ねぎらい」はそもそも上から下への表現であるために目上を相手としては使えないものであるとしており、この点も本研究およびその他の先行研究の立場とは相違がある。これらについて検討を重ねることも本研究を含めた後続研究の課題として挙げさせていただく。

以上、本章では基本的には「ねぎらい」行動に関する日韓対照研究について概観した。

3. 予備調査

3.1 日本語母語話者の自然会話に見られる「ねぎらい」

3.1.1 調査概要

予備調査として、日本語母語話者同士の自然談話を収録し、「ねぎらい」がどのように現れるかを観察した。なお、収録は2023年2月24日に行われた。

対象は日本語母語話者2名（A:女性30代後半、大学教員/B:男性30代後半、大学職員）であり、インフォーマルな形式での会話が可能な親しい職場の同僚という関係である。

自然会話の収録ではあるが、トピックスは本発表者が指定した。すなわち、1. コロナ禍での仕事や生活について。2. お互いの仕事について長所短所を推測し、聞いた本人はそれを聞いて自由に反応、会話。3. 自分の仕事について長所短所を開示し、会話。である。

トピックスの選定理由としては、本研究の嚆矢となる釜田(2018)を受けてのものである。つまり、「所属に対する推測」から「ねぎらい」が出てくるという主張に対し、本研究が懐疑的な立場をとるためにそれを検証するべく考案された。

収録語は本発表者が文字化を行い、上述の持田(2023)で提示された定義に合致するものに関して「ねぎらい」行動であると見なし、抽出した。

3.1.2 調査結果

本節においては、前節で挙げた調査の結果を報告し、得られた結果から本調査で検証するべき仮説を提示する。

【仮説1】 釜田(2018)の結果は、「ねぎらい」行動のセオリーよりは、初対面会話のセオリーである可能性がある。

前述の通り、釜田(2018)においては、属性に対する質問→応答→属性から労力を推測した「ねぎらい」、というパターンが存在することが主張されている。

しかし、本発表における予備調査では、職場の親しい同僚という間柄であるため、属性に対する質問はほぼなされず、属性から労力を推測した「ねぎらい」も現れなかった。トピックスの2番は属性への類推（長所・短所）であるにも関わらず、「属性への類推から出る「ねぎらい」」は一つも現れることはなかった。

この点に関しては今後、量的な調査を通してさらなる検証が必要となろう。

【仮説2】 釜田(2018)で述べられている「愚痴」と「ねぎらい」の関連性について、女性に見ら

れる傾向である可能性と、「愚痴」だけではなく、「愚痴」を含めた「謙遜」などの自分を下げる行為全般である可能性がある。

<資料1>に記載した会話を参照されたい。なお、「//」は発話の重なりを、「* *」は聞き取れない部分に関する表示である。

<資料1>トピックス3から抽出

A：辛かったっていうか、その、2百何十時間言われたら（B：//笑）、全然、いや、辛いことねえわって感じ（B：//おかしいからね、これ* * *）だけどー、でもやっぱり授業準備かなあ [中略] 今振り返ったら、なんか・・・まあ、ようやくたな、とは思うけど。

B：すごい、（//A：それはちょっと辛かったかな）や、先生そういうとこやっぱ大変だな* * *。

<資料1>は、Bが自分の経験として200日以上休みなしで働いたという話をした直後のAの自身の話である（「時間」は言い間違いと思われる）。Aは、“それに比べたら自分には辛いことはない”という趣旨の発話をしてから、「だけど」と前置きをして自身の辛かった経験を開示した。それを聞いたBは「大変」という「ねぎらい」の定型的な表現を発話するに至っている。

この流れは釜田(2018)で提示された「愚痴」と「ねぎらい」の関連性とリンクする。しかし、Aの発話（下線部分）は「愚痴」と捉えるには無理があろう。よって【仮説1】として、「愚痴」に限らず、自分を下げる言語行動と「ねぎらい」に関連があると仮定し、今後はさらに収録数を増やすとともに、「自虐」や「謙遜」などの言語行動についての先行研究をあたり、考察を深めることが課題となる。

また、この類の「ねぎらい」談話は男性側の発話には見られなかった。釜田(2018)でもインフォーマントが女性同士であったために「愚痴」が複数回出てきた可能性もあるため、今後、検証を重ねたい。

3.2 韓国語母語話者の自然会話に見られる「ねぎらい」

日本語母語話者同士の自然会話の収録と同様に、韓国語母語話者同士の自然会話を収録・観察した。なお、収録は2023年2月25日に行われた。

対象は韓国語母語話者2名（女性20代後半、大学職員/男性30代前半、会社員）であり、年齢差があるために片方はフォーマルな形式での発話となるが、親しい関係である。

【仮説3】親しい間柄の場合、韓国語文化ではなかなか「ねぎらい」行動が見られない。

本発表における上記予備調査において、韓国語の会話の中に「ねぎらい」の言語行動は見られなかった。日本語での調査において「ねぎらい」が出ていたのと同じような場面においては、「ねぎらい」よりは、釜田(2018)の言うところの「共感」であったり、または、相手の労苦に対して“そんなことは大したことではない”という趣旨の発言が目立った。

これに関し、単なる個人差であるとも考えることもできる。しかし、上述の守屋(2002)でも挙げられている通り、韓国語文化において、親しい関係同士の場合には日本語に比べて「ねぎらい」や感謝の表現が使用されにくいことが指摘されている。守屋(2002)の結果が、発表当時から20年経過した2023年においても同様の結果であったと見ることができ、さらに、これまでになされてきた配慮言語行動の日韓比較研究において、親しい間柄の場合、その行為自体が日本語文化に比べて韓国語文化ではあまり見られない(なされにくい)ことが指摘されている(生越2008,2012)ため、本発表におけるこの結果も、先行研究を補強するものであると言えるだろう。

しかし、前述の通り、単なる個人差であることも可能性として拭えず、さらに、本発表における調査のインフォーマントの2人のうち1人は30代であったため、もう少し若い世代の韓国語母語話者ペアの会話の収録・観察をすることを今後の課題の一つとしたい。

4. 今後の課題

今回の発表では、誌面の都合上、具体的な事例の紹介や細かい分析までは至っておらず、問題提起に近い分析にとどまっている。今後、より豊富な会話データを用いて踏み込んでいきたい。また、さらに、ねぎらわれた側がどのような反応をするのかについても本発表においては分析対象にはできなかった。今後の課題とさせていただきたい。

【参考文献】

- 生越直樹(2008)「相手の所有物を使う際の言葉の有無に関する日韓比較」『対人行動の日韓対照研究』ひつじ書房pp.31-59
- 生越直樹(2012)「『配慮』の示し方-日本と韓国の言語行動の比較から-」『『配慮』はどのように示されるか』ひつじ書房pp.171-187
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店pp.214-218
- 釜田友里江(2018)「ねぎらい発話の連鎖-大学1年生の初対面会話と知人会話に焦点を当てて-」『待遇コミュニケーション研究』(15)待遇コミュニケーション研究会 pp.35-51
- 金東奎(2022)「『国語に関する世論調査』における「ねぎらい」の表現意図を持つ言語行動についての一考察-韓国語の言語行動との比較を含めて-」『일본연구』(56)중앙대학교 일본연구소 pp.7-27
- 塩田雄大(2012)「現代人の言語行動における“配慮表現”~「言語行動に関する調査」から~」『放送と調査』(62)NHK放送文化研究所pp.66-83
- 持田祐美子(2023)「『ねぎらい』の日韓比較-先行研究の整理と翻訳文の分析-」『한국일본학회 제105 회국제학술대회』(予稿集) pp.88-93
- 守屋美佐子(2002)「韓日両語の「ねぎらい」表現-感謝表現との使い分けを中心に-」『일본근대학원

구』 (4)pp.139-159

한미경(2011) 「한일 영상매체의 담화의 배려표현양상」 『일본연구』 (50)pp.357-384

韓國日本語學會
第47回 國際學術發表大會

學術シンポジウム
(學術심포지엄)

企劃發表3

初対面自由会話における話題展開分析

－在日コリアンの資料を中心に－

張良光(カトリック大学)

1. はじめに

「複数の言語を知っていること」と、「言語にある固有の文化に気づき、その文化的アイデンティティを尊重すること」は違う。前者は、多言語主義(multilingualism)と呼ばれ、ある社会にさまざまな言語が共存していることを指し、後者は、複言語・複文化主義(plurilingualism)と呼ばれるものである。また複言語・複文化能力とは、程度に関わらず複数言語を知り、程度に関わらず複数文化の経験を持ち、その言語文化資本の全体を運用する行為者が、言葉でコミュニケーションし文化的に対応する能力を言う。

複言語教育は主に学校教育を通して形成され、複文化能力は家庭や職場といった学校外の環境で形成されることが多い。例をあげると、日本語学習者が日本へ留学し、自国と日本の文化とを比較することで、自国の文化が絶対的なものから相対的なものになる。これにより複文化能力が育つ。さらに、個別言語の運用は多くの場合、ある程度は区切られることがあるが、複文化能力については言語能力以上に横断性が高く、国境を越えるような大きな移動をした場合、培われた複文化能力は、新しい社会に属してもそれを発揮することができる。このように考えた場合、在日コリアンや日韓ダブルの家庭環境で育った日本語母語話者は、複文化能力が高いことが推測される。しかし、個別言語はテストなどによりその能力を数値ができるが、複文化能力は数値化することが難しく、何を持って能力が高いとするのか問題点がある。

そこで本研究は、まず文化面の相違点を見るために在日コリアンや日韓ダブルの家庭環境で育った日本語母語話者(以降、複文化話者)と日本語母語話者の初対面自由会話、そして日本語母語話者同士の初対面自由会話を比較し、どのような話題を扱い、どのようにして話題を展開させているのかを比較分析する。

2. 先行研究

2.1 自由会話の分析について

会話の入り方や話題転換、話題展開の仕方、話題の構造、ストラテジーなどについて考察した

りする研究として、エスノメソドロジーの会話分析がある。その分析対象となる会話には、課題遂行の性格が強いものと、性格が弱いものがあると考えられる。 依頼や勧誘に代表される前者は、ザトラウスキー(1993)をはじめ、カノックワン(1995)、三井(1997)、梶本(2000)、鈴木(2007)など、構造面での研究が多く挙げられる。一方、自由会話に代表される後者の構造面での研究は、管見の限り少ない。その理由として、「人間の行動には、どんなものにも目的があると言われるが、しかしものを買う、人に頼み事をする、身の上相談をする、学生登録をする、子供を叱るなどの行為と、ここで取り上げる雑談と言われるような行為にはやはり違いがある。前者には明確な到達目標があり、それに向かってある一連の行為が一定の順序で展開するであろうことが容易に想像されるのに対し、雑談とかおしゃべりと言われるものはどこへ向かってどんな風に展開するのか予想がつかない、いかにも取りとめがないという印象があるからである」と指摘している(大浜 1995:207)。つまり、明確な到達目的が見えない自由会話は、構造化するのに困難な会話であると言える。また自由会話の構造分析を行った筒井も、「目的の明確な課題遂行型の会話とは会話の意義や話題の性質、会話参加者の役割などに関して、異なる特徴を有する」としている(筒井 2012:6)。

しかし、会話は課題を遂行するよりも人間関係の構築に大いに寄与している。Brown&Yule(1983)によると、自由会話が情報伝達の道具であるだけでなく、人間関係の構築に重要な役割を果たすことを示唆している。つまり、日常のコミュニケーションの会話は、特定の情報伝達を目的としたやりとりだけではなく、共通の話題を探りながら会話をし、それは相手と会話を続けながら打ち解け合うことを目的とした相互作用的なものが多く存在しているのである。このような会話は、情報交換よりも会話の維持、そしてそれによる円滑な人間関係の構築が最優先であり、仮に情報が伝わらなかったとしても後に支障が出ることが少ないことがわかっている。(村田 2000)

また、自由会話の特徴を明らかにしようとした研究に河内(2003)がある。河内は、自由会話に関する話題展開を分析し、話題開始において用いられる表現として、疑問表現や提題表現の助詞の省略、間投詞・感動詞などの出現率が高いことなどを明らかにした。

自由会話が人間関係の構築に重要な役割を果たすものであるなら、どのような発話のやりとりから成るのか、その際にどのような言語形式が用いられるのかを明らかにしなければならない。このような問題意識から、構造の面と内容の面という二つの側面から分析を行った研究として筒井(2012)と張(2022)があり、筒井は自由会話の中には連鎖組織があることを明らかにし、張は初対面男女間自由会話の話題展開パターンを明らかにした。

2.2 初対面会話での話題の分析について

初対面会話と話題に関連した調査研究として、Bergeretal.(1976)がある。Bergeretal.は、アメリカ人の初期の相互作用における話題の選択順序を明らかにするため、アメリカ人200人を対象に、初対面会話を2時間するという状況を想定させ、150項目の話題を15分単位の8つの時間帯に分類させた。その結果、まず身の上情報と表面的な情報が選択され、後半ではより深刻な内容であると思

われる話題が選択されるということがわかった。また、話題として使われないのが年収、年齢、家族や自分に関する社会的に否定的な情報であることが分かった。

また、韓国人および在日・在米韓国人の初対面の話題については、任榮哲(1993)の意識調査がある。任榮哲の意識調査の結果、韓国人は男女ともに初対面の相手の最も知りたいところは「職業」であることがわかり、年齢別では老年層は経済状況や出身地、中年層は職業、若年層は年齢や趣味が最も知りたい話題であることがわかった。このように、初対面会話での話題選択には文化的な問題、および社会的な階層の問題があることがわかる。

自由会話の構造や内容面の研究により、日本語母語話者の話題展開のパターンが明らかになり、話題選択では複文化話者の文化的な問題、および社会的な階層の問題があることがわかったが、複文化話者の会話の構造や内面性、そして日本語母語話者との比較分析については言及がなかった。

本研究は、自由会話の構造面と内容面という二つの側面から分析を行うために、発話機能の連鎖を連鎖組織とし、そのひとまとまりを話題と仮定する張良光(2022)の分析方法を参考に、複言語話者と日本語母語話者の初対面自由会話、そして日本語母語話者同士の自由会話を比較し、話題の対象や話題展開パターンについて分析を行う。

3. 分析方法および資料

3.1 分析方法

話題認定の問題として、その範囲が挙げられる。話題の開始、終了は、明らかな談話標識(話題転換マーカーや沈黙など)があれば境界付けがしやすく、話題を認定しやすい。しかし、境界付けが困難な、いつの間にか話題が展開されている場合は、話題の範囲が明確に表すことができない。これは、そこで本研究は、発話ひとつひとつを連ねていき、ボトムアップ式に積み上げ、それを話題と仮定する。そして、話題開始の認定として、Schegloff&Sacks(1973)の隣接ペア(adjacency pair)を参考に、会話参加者一方が情報の所有者である場合は、情報要求ではじまるものと、情報提供ではじまるものとする。そして、共有している情報を扱う場合は、情報要求および情報提供からはじまるものとし、話題の第一発話のタイプ別の分類を行う。「質問からはじまる話題展開」は、相手の情報を得ようとする情報要求などからはじまるものであり、「自己開示からはじまる話題展開」は、まず自分の情報から開示する情報提供などからはじまるものとする。「予め共有している情報からはじまる話題展開」は、会話参加者が共有している情報を扱うものとする。

また、話題の認定上、話題をどの単語にするかによっても、その人の主観性が強く働く可能性があるため、本研究は話題の下位分類として、話題の対象について分類する。それが会話している現場なのか、外なのか、また人物なのか事物なのかを考慮し、「会話参加者(会話に参加してい

る)」と「第三者(会話に参加していない者)」、そして「事柄」と分類し、対象別に第一発話の分析を行う。

3.2 分析資料

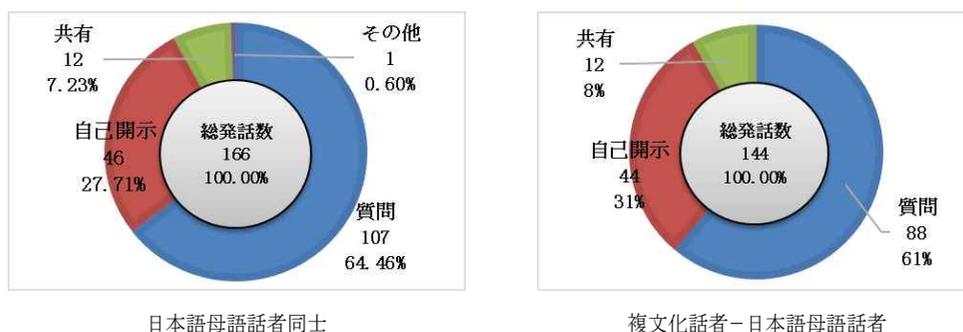
本研究では、自由会話の分析をするにあたり、初対面男女の自由会話に限ってデータ収集を行った。これは、友人同士の自由会話と比べて、初対面の自由会話の方が話題が限定され、使用率の高い連鎖組織が現れるのではないかと考えたからである。そのため、性別も男女のものにした。ただし、自由会話とは初対面だけに関わらず幅広いため、本研究のデータだけで、自由会話一般について論じることはできない。また、調査協力者として、20代から30代に設定した。会話データを用いた研究では大学生同士の会話がデータとして用いられることが多いが、大学生の会話だけをみるのはデータとして偏りがあるのではないかと考え、様々な経歴で社会人として生活している20-30代、大学生や大学院生も含めて調査協力者とすることにした。

本研究のデータ収集の方法として、録音協力者同士面識がないように、いくつかのグループから男女の組になるように選び、協力をお願いし、複言語母語話者と日本語母語話者の会話5件と日本語母語話者同士の会話5件録音を行った。録音方法としては、静かな場所に行き、テープレコーダーを設置し、30分自由に話してもらい、約35分後にテープレコーダーを回収した。回収した音声データは、すぐに文字化を行い、さらに文字化したものを別の人が確認し、10件のデータをそろえた。本研究で用いる資料は、総録音時間数約355分、総発話数5142であった。本研究の初対面会話の資料データを<表1>に示す。文字化の方法は、曹英南(2013)にしたがった。

<表1 被験者の属性>

日本語母語話者同士の会話					複文化話者と日本語母語話者の会話				
	会話参加者 (年齢/性別)		録音時間	発話数		会話参加者(年齢/性別)		録音時間	発話数
	A	Ja(38/男)				Jb(22/女)	約33分		
B	Jc(28/女)	Jd(31/男)	約39分	770	G	Kb(28/男)	Jl(20/女)	約38分	384
C	Je(36/男)	Jf(31/女)	約41分	597	H	Kc(25/男)	Jm(24/女)	約32分	653
D	Jg(33/女)	Jh(21/男)	約35分	622	I	Kd(20/男)	Jn(23/女)	約34分	399
E	Ji(28/男)	Jj(23/女)	約33分	457	J	Ke(24/男)	Jo(28/女)	約34分	382

4. 分析結果



<図1> 話題の第一発話の分類別割合

<表2> 話題の下位分類別割合

		日本人日本語母語話者同士		複文化話者-日本語母語話者	
質問	会話参加者	77	71.96%	65	73.86%
	第三者	1	0.93%	10	11.36%
	事柄	29	27.10%	13	14.77%
自己開示	会話参加者	14	30.43%	14	31.82%
	第三者	2	4.35%	6	13.64%
	事柄	30	65.22%	24	54.55%
共有	会話参加者	1	8.33%	1	8.33%
	第三者	0	0.00%	2	16.67%
	事柄	11	91.67%	9	75.00%
その他	会話参加者	0	0.00%	0	0.00%
	第三者	0	0.00%	1	100.00%
	事柄	0	0.00%	0	0.00%

<図1>の円グラフを比較した結果、割合に大きな差異が見られず、話題展開パターンに差異が表れなかった。しかし、<表2>の話題の下位分類別割合を見ると、複文化話者-日本語母語話者間会話は、日本語母語話者同士の会話に比べ、話題の総数は少ないながら第三者を対象とした話題が多く現れたことがわかった。複文化話者は、日本語はもちろんのこと、日本文化の能力も非常に高い。したがって、話題展開の方法に違いは現れなかったが、扱う話題の対象が第三者に多く現れたのは、互いの共通点、互いに知っているであろう人物を扱うことにより日本人というカテゴリーに所属していることを強調していたのではないかと考えられる。

質問に関しては、どちらの会話からも会話参加者を対象にした話題が多く出されており、日本語母語話者同士の会話は、第三者に対して、ほぼ質問を使用していないことがわかった。それに対し、複文化話者-日本語母語話者間会話は、日本語母語話者間同士の会話よりも会話参加者を対象にしたものの比率は高かったが、第三者に関して質問したものが多いことがわかった。

自己開示に関しても、複文化話者-日本語母語話者間会話からは、第三者を対象にした話題が多いことがわかった。

最後に予め共有された情報に関しては、どちらも事柄を対象とした比率が高いことがわかった。これは、共有していることを表明しながら会話を展開していく規範意識が働いていることが考えられる。また複文化話者-日本語母語話者間会話では、第三者を対象にした話題が上がっており、つながりというものを確認する作業が無意識的に働いているのではないかと考えられる。

5. まとめ

本研究は、在日コリアンや日韓夫婦の環境で生活していた子を対象に初対面会話を日本語母語話者同士の会話と比較分析し、話題展開パターンに差異は見られなかったものの、その話題の対象に違いがあることがわかった。複文化能力がどのように現れるかについて分析を通じて垣間見ることができたが、複文化能力をどのように評価するのかについては今後の課題としたい。

《参考文献》

紙面の都合上、割愛する。

国際大学として

本学では、欧州、ASEAN、韓国、中国、台湾などからやってきた多くの留学生が学んでいます。2022年には、Asia Summer Programを韓国、マレーシア、フィリピン、インドネシア、中国などの協定校と連携してオンラインで開催し、韓国からも13名の参加がありました。今後もこれまで築いたグローバルネットワークを基に実りある教育成果をあげてまいります。このような活動が評価され、Times Higher Education (THE)「2022年日本ランキング」で54位となりました(国際性 全国790校)。

JIU日本語教育・外国語教育への取組

日本語教員養成課程を国際人文学部に設置

Japanese Studies Programを学部の科目/留学生別科として設置

JIU日本語教員養成課程(副専攻)と大学院人文科学研究科グローバルコミュニケーション専攻日本語教育研究分野を修了した学生たちは、国内の日本語教師はもとより、カナダ、マレーシア、中国、台湾など海外で日本語を教える修了生たちも多くなります。

また、グローバル化により日本国内、千葉県内に多くの外国につながる人々が居住するようになっており、日本語教育が多様化し、そのニーズが高まっています。

城西国際大学(Josai International University)

千葉東金キャンパス

〒283-0002 千葉県東金市求名1

東京紀尾井町キャンパス

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

問い合わせ先

語学教育センター

TEL: 0475-55-8810

E-mail address: cie@jiu.ac.jp